

| | |
|------------------|---|
| Title | 奈良絵本『三十六歌仙』について |
| Sub Title | |
| Author | 石川, 透(Ishikawa, Toru) |
| Publisher | 慶應義塾大学国文学研究室 |
| Publication year | 2011 |
| Jtitle | 三田國文 No.54 (2011. 12) ,p.89- 92 |
| JaLC DOI | 10.14991/002.20111200-0089 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20111200-0089 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奈良絵本『三十六歌仙』について

石川 透

一、はじめに

『藝文研究』第百一号(二〇一一年十二月)に、拙論「奈良絵本『百人一首』について」を掲載した。そこで述べたように、奈良絵本として、和歌文学の作品も多く仕立てられている。『百人一首』は、江戸時代中期から版本の絵入り本が大量に生産されるが、江戸時代前期においては、数は少ないものの、奈良絵本にも仕立てられていたのである。

一方、『百人一首』と並んで、江戸時代に大流行した絵入り和歌文学作品として、『三十六歌仙』がある。現在は、『百人一首』の知名度には劣るであろうが、江戸時代までは、『百人一首』と並ぶ存在であった。また、鎌倉時代・室町時代の中世において、絵入りの資料は、『百人一首』にはなく、この『三十六歌仙』ばかりなのである。その形は、ほとんどが絵巻物であって、中世の段階の冊子体の絵入り『三十六歌仙』の存在は、聞いたことがない。

拙著『奈良絵本・絵巻の展開』(三弥井書店、二〇〇九年五

月)等に述べたように、基本的に、室町時代中期以前においては、絵入りの資料は巻物に仕立てられている。絵入りの冊子本が流行するのは、室町時代中期以降の奈良絵本が始めなのである。

二、『三十六歌仙』の絵入り資料

『三十六歌仙』も、まさに、絵巻で仕立てられたものが冊子化された作品といえよう。美しい直筆の挿絵を伴った冊子としては、奈良絵本が最初であろう。ただし、この『三十六歌仙』は絵入り資料として、さまざまな形に作られている。古い作品としては、神社等に奉納される額装にされたものも江戸時代初期から作られている。また、屏風にされた作品や、額装ではなくとも、一枚物として一首ずつ描かれた作品も存在する。

江戸時代中期以降、近代に至るまで、この一枚物の『三十六歌仙』は、相当数作られたと考えられ、ちよつとした古書市や骨董市へ行けば必ずお目にかかるほどである。それらの全てを整理するのは難しいであろう。また、それらの中には、もとも

と奈良絵本のような冊子本であったものも存在しているであろう。しかし、全体的に見れば、最初から奈良絵本の形で作られた作品は少ないといえよう。

さらに、版本の『三十六歌仙』は、一冊で独立した作品は少ない。『百人一首』や『女大学』等の往来物の一部として、頭書されているものが圧倒的に多いのである。このことによつて、江戸時代の女性の教養として、『百人一首』と並ぶ存在であったことがわかる。

拙論「奈良絵本『百人一首』について」に触れたように、『百人一首』の奈良絵本はそう多く存在しているわけではない。それは、江戸時代前期にまで遡る『百人一首』の絵入り版本が少ないことに起因する。この『三十六歌仙』も、その版本は、往来物に付属している以上、江戸時代前期の段階での版本は少ないと言える。したがって、『三十六歌仙』の奈良絵本も、意外に少ないのである。

そのような中で、ここに紹介する奈良絵本『三十六歌仙』は、半紙縦型のよく普及した奈良絵本の形をとっている。朝倉重賢の後期の筆跡を有していることからして、江戸時代前期の作品として良いであろう。『百人一首』の奈良絵本は、同じ半紙縦型であっても、袋綴じという、半紙縦型としては特殊な体裁であった。しかし、この奈良絵本『三十六歌仙』は、普通の綴葉装である。

三、奈良絵本『三十六歌仙』の書誌

ここで、奈良絵本『三十六歌仙』の主な書誌を、あげてみよう。

所蔵、架蔵

形態、奈良絵本、一帖

寸法、縦二四・〇糎、横一八・〇糎

表紙、鶯色地金泥模様表紙

外題、題簽「歌仙」

内題、なし

料紙、斐紙

奥書、なし

複製、なし

四、おわりに

このような奈良絵本『三十六歌仙』は、他にも存在しているであろう。それらを含めて、さまざまな研究が期待できる資料なのである。今後の奈良絵本『三十六歌仙』の研究が進展することを願ひ、本稿を閉じたい。

なお、最後にその写真を掲載する。



